平成 21 年度　第２回まちづくり講座　議事要旨
「それって景観？」－みんなでつくろう練馬の景観―

日時：　平成 21 年 11 月 14 日（土）14：00～16：30
場所：　練馬区役所東庁舎 6 階 603 会議室
形式：　円卓会議方式
コーディネーター：　(社)東京建築士会練馬支部景観部会
主催：　まちづくり講座企画運営会議（東京建築士会練馬支部、NPO 練馬まちづくりの会、練馬区都市整備部都市計画課、練馬まちづくりセンター）
参加者：19 名
パネラー/コーディネーター：

・竹谷 恭子氏（光が丘まちづくりフォーラム）：地域まちづくり
・谷口 紀昭氏（江古田アートエコプロジェクト）：環境まちづくり
・渡邉 嘉之氏（練馬区教育委員会学芸員）：歴史・文化のまちづくり
・岩間 有希氏（ネリマ・ベジタブル・カフェ）：農と食のまちづくり
・西 和彦氏　（Nerima 景観まちづくり会議）：景観まちづくり
・杉崎 和久氏（練馬まちづくりセンター）：コーディネーター

■趣旨・背景説明：奥村 隆史氏（東京建築士会練馬支部副会長／東京建築士会景観部会長）

(社)東京建築士会練馬支部景観部会では、講座と景観ウォッチングのセットの企画を開催し、今年で 4 年目となる。今回の講座に先立って開催された 10 月 31 日（土）の景観ウォッチングも参加者・スタッフ合わせて 50 名の参加があった。

今、どうして景観が取り上げられるのか

現在、諸外国に比べて日本の景観が荒れてきている。日本は第二次世界大戦により、荒れた国土や都市の復興を急ぎ、美観などは二の次、三の次の機能性を優先した建築やまちづくりが行われた。戦前には美しい景観が残っていた地域にも、乱雑に建物や高速道路が建築され、浜辺や河原もコンクリートで固められてしまった。

やがて高度経済成長期がひと段落し、人々の生活に余裕が生まれてくると、外国旅行も自由に出来るようになった。諸外国での住環境を目にして、日本の都市に帰ってくると「夢が覚めて、がっかりしてしまった」というような経験してしまう。このように、外からの刺激を受けて、日本でも景観への意識が高まっていった。

景観活動の始まり 1970 年代～

その中で、京都・奈良・鎌倉といった古い町並みや歴史的な都市への関心が高まり、「積極的に古い町並みを保存していこう」という意識が生まれた。1966 年に古都保存法が制定

されると、歴史的街並みの保存活動は活発になっていった。
1970 年代は、歴史的街並み保存活動が定着した年代である。
1980 年代終わりの方になると、古いまちだけでなく、まち全体の景観を大切にしていこうという気運が高まってくる。神戸市で都市景観条例が制定され、横浜でも積極的な景観行政がなされるようになった。地区計画の制度や住宅地の良好な環境をつくる計画が出来、「まちをつくっていこう」という意識とともに、景観まちづくりの試みが行われた。
1990 年代は、景観に対する考えが普及し、景観条例の制定など地方自治体で国より活発な活動が起こり、それを受けて国が動くというかたちになった。
そして、2000 年代に景観法が制定されることとなった。
このような流れを受けて、現在練馬区では、練馬区独自の景観を自分たちでつくっていこうという段階に入ってきている。

景観がよくなるには

しかし、練馬区が景観計画やルールをつくったところで、すぐに景観がよくなるわけではない。新しい法律、制度は新しく作られるものには適用されるが、まちの中には既にあるものの方が圧倒的に多い。まちのなかで、少数の部分が変わっても全体が変わったという印象にはならない。そこで、まちづくり活動をしている団体が、日頃の活動を通して少し景観のことを意識することで、既存のまちが変わってくるのではないだろうか。
景観の世界には、生活景観という言葉があり、景観とは暮らしている人々の日頃の生活がそのまま映し出された結果であるという意味をもっている。つまり、人々の生活が美しくなれば、景観も美しくなり、文化レベルの高い生活をすれば、文化的な香りのするまちになるということである。
パネラーの皆さんの日頃の活動を紹介していただき、その中に「実は、景観につながっている」という部分が明らかになっていけば、今回の会議が有意義なものになっていくのではないだろうか。

■パネラー紹介

・竹谷 恭子氏（光が丘まちづくりフォーラム）：地域まちづくり

光が丘とその周辺地区を拠点に、まちづくりコミュニケーションの充実を目指している。まち歩きやイベントのなかで、公園の実態調査、生態調査、放置自転車問題への取り組み、光が丘 CM コンテストなどを行ってきた。

・谷口 紀昭氏（江古田アートエコプロジェクト）：環境まちづくり

江古田にて、３大学(武蔵大・日芸・武蔵野音大)と商店会とで連携し、地域を巻き込んだ町おこしを計画している。日芸・音大を中心としたアートと日常的につながる商店街づくり、武蔵大と連携したエコプロジェクトなどを計画中。

・渡邉 嘉之氏（練馬区教育委員会学芸員）：歴史・文化のまちづくり

学芸員として、練馬の歴史を明らかにし、区民に広く紹介する活動を行っている。
以下、郷土史研究の立場から、練馬の景観についての渡邉氏の話。

◎練馬が区外の人から見て、どのようなイメージをもたれていたのか

①風光明媚な自然

第二次世界大戦後、主に都心に住む人々から練馬の自然の風景は評価されていた。
特に石神井公園三宝寺池畔は、練馬を代表する景色として評され、版画や雑誌、俳句などに度々登場している。石神井公園は、当時から地元の人々によって積極的に自然を売りとした宣伝活動が行われており、景観を活かそうというという動きが見られていた。三宝寺池周辺は、今でも変わらぬ自然を残している。

②田園風景

田園風景は、人が作り出した自然のなかの景観であるが、練馬大根の大根干しなどの牧歌的な風景は都会の人々の心をなごませ、武蔵野を代表する風景として広く愛され、評価されていた。

現在、都市化が進むなかで、このような第二次大戦前の風景への意識は薄れているように考えていたが、パネラーの活動紹介を受け、実は今でも練馬の人々に、練馬らしい風景への意識や愛着は根付いているのではないだろうかと感じた。

・岩間 有希氏（ネリマ・ベジタブル・カフェ）：農と食のまちづくり

練馬の若い世代を対象に、農のある生活をテーマとして農・ひと・野菜をつなぐ活動を行っている。農家を巻き込んだイベントの開催、児童を対象にした食育教室などを通して、練馬を含めた日本全体の地域活性化を目指している。
岩間氏は個人の活動として、過疎地での地域イベントに参加し、都心の若者とともに東京と地方をつなぎ、活性化をしていきたいと考えている。

・西 和彦氏　（Nerima景観まちづくり会議）：景観まちづくり

Nerima 景観まちづくり会議にて、練馬の景観について考える活動を行っている。

景観とは、区民・活動団体・学校・行政などの長い時間をかけた様々な活動の総和である。日常的な地域での活動は、景観に様々な影響を与えることから、今後も多様な活動が期待される。その中で、活動団体にお願いしたいことは、それぞれの活動の場で景観を意識し、気づくことではないかと考えている。

◎練馬らしい景観とは何か？

本来、景観活動とは守るべき自然や歴史的な景観資源を持っている地域が出発点である。一方で、練馬は特別な景観資源を持ち合わせない、「普通のまち」である。こうした「普通のまち」での景観づくりは、新しい試みとして、全国的に注目を集めている。景観活動に関しては、世田谷区が先行している。世田谷区の区民参加の方法としては、「地域景観資源」をキーワードに守るべき風景を指定し、それを守っていこうというものである。

練馬の場合は、特徴として非常に活発なまちづくり活動グループがあり、このことが景観づくりにとって大きな資産ではないかと考えることが出来る。それぞれの活動グループから景観への意見や提案を練馬の景観づくりの出発点としてみてはどうだろうか。

今回のパネリストの行っている活動は特定のテーマを持っているものであるが、こういった特定のテーマを掘り下げていくことが景観への新しい発見にもなり、また、それぞれの活動にとっても景観を意識することで、新たな視点になり、活動の厚みにつながるのではないかと期待している。

以下、Nerima 景観まちづくり会議にも参加し、石神井川周辺のまちづくり活動を行っている要氏の話

要 久美子氏（なじみ研究会）

子育てをきっかけに、子どもと石神井川付近を散歩する機会が出来た。そのときに、自分が幼い頃にあった練馬の田舎の風景が、なくなっていることに気がついた。昔のように身近な川で遊べたらどんなに楽しいだろうと考えるなかで、今後まちづくりをする際に、どのようなまちにしていきたいかをみんなで考えたいと思い、今の活動に至っている。

活動にあたって、景観会議に参加するようになり、さまざまな情報交換を通して考えに広がりが出てきた。

■ディスカッション（第一部）

ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ杉崎氏：様々な日常の活動の表現がまちの表情に表れてくる。「いろんな人がいて、いろんな活動をしているまちっていいよね」ということですが、まず一巡目は、景観というテーマで今回の会議に呼ばれたときに、どう思いましたか。改めて自分たちの活動と景観についてどのように考えたのか、パネラーのみなさんに聞いてみたいと思います。

竹谷氏：この話を頂いたとき、景観とはなんだろうと考えました。私たちが活動している光が丘は、練馬の中でも特殊な場所です。25 年前にグランドハイツの跡地をもとにして光が丘公園と団地が出来、都市計画に基づいてまちがつくられているので、今建っているものの建て替えや、新しい建物を建てることは容易ではありません。今の悪いところをどう直していくか、という活動になります。一番の特徴は光が丘公園と周辺の 4 つの公園とい

う素晴らしい場所があることですので、それらの場所を守っていきたいと考えています。今、行っている活動として公園の清掃、地区祭などを通し、光が丘だけでなく、土支田・高松・旭町といった周辺地域の様々な人たちが関わってきています。その地域も変わりつつあり、現在も残っている農地を良い景観として残していきたいと考えています。

杉崎氏：光が丘地区の問題点などについても話していただきましたが、もうひとつ簡単にご質問します。ご自身の普段の活動の中で、景観を意識していますか？

竹谷氏：普段活動している地区に農家の直売所があり、よくそこへ行って買い物をしたり、農家さんのところへ行ったりします。そうした普段の行いのなかで「これっていい景観だなあ」と思うことがあります。

杉崎氏：次に谷口さんにお伺いします。谷口さんが行っているミツバチのプロジェクトが、どのように景観に寄与するか意識されていますか？その活動と景観の結びつきをどのように考えているか伺いたいと思います。

谷口氏：まちづくりそのものは総合的なものだと考えています。江古田は自然発生したものがすでに存在しているので、その辺りは少し一貫性を意識したほうがいいと思いますね。ただし、当面の問題としてシャッターを下ろす商店が増えていたり、高齢化が進んでいる現状があります。江古田には、他のまちにはない特徴として三大学があり、常に若者が行きかっているということがありますので、学生・大学を通して、まずは商店街の活性化を進めていこうということ考えております。

そして、エコの観点からまち全体の環境を考えて、みどりを増やす運動や放置自転車などの問題も改善しなければいけないと思います。そのなかでミツバチのプロジェクトは、ミツバチを飼うことで、まちに花を増やし、生物多様性の問題も考えていくことができます。大手の建築会社でも、ミツバチを飼うプロジェクトを行っているところがあり、建物・自然・環境・地域を一貫して考えているところもあります。

景観はいつも頭のスミにありますが、当面はアートとエコ、そのなかのミツバチのプロジェクトを通して、地域活性化を図っていこうと考えています。

杉崎氏：次に岩間さんに、やはり日常の活動で景観を意識しているか、コメントいただきたいと思います。

岩間氏：意識はしているけれど、活動の中ではそこまでしていないという感じです。ただ、上石神井で古い平屋が取り壊されたとき、やはり次に何が出来るか気になっていました。今の世の中、駐車場かマンションかなと思っていたら、隣の畑が広がって、とても嬉しか

ったです。道行く人たちは、畑を見ながら歩いていて、そこを通るときはみんな和んでいるんだろうなぁと感じました。

それから、今朝、別の活動団体である「ねりま・ごみフォーラム」さんのゴミの回収の助手をしたのですが、練馬区内を車で走っていて、畑の近くや緑が多くあるところを通ると、やはりほっとしました。

杉崎氏：次に渡邉さんのお話を伺いたいと思います。先ほどの渡邉さんのプレゼンで、かつて練馬に都心の人の心を和ませる風光明媚な風景があり、それが今でも残っている。そして、それが練馬の固有の風景なのだというお話でしたが、今回主催者側としては、練馬は「普通のまち」で、その「普通のまち」の景観をどうするか、というキーワードを打ち出していたので、新たな視点となりました。日常の活動の中で、区民の方々とまち歩きなどもされているそうですが、こうした練馬の街並み、風景について区民のみなさんの話題になることはありますか？

渡邉氏：街並み自体が話題になると言うよりも、参加される方は歴史好きですので、史跡の勉強などをして、そこからどこを見に行こうかという話になります。そうすると、「こんないいところがある」という話題の中で、もともとあった練馬の風景などが上がることはあります。ですので、特別に話題にするというよりも、普段から練馬固有の風景を見つけることから始まっているのです。

地域資源という、それぞれの地域固有のものがどこにもあって、それを大切にすることが、景観を守ることにつながると思います。私たちがしていた活動は、そうした地域資源への意識を根っことして、その意識を深めていく活動だったのではないかと考えています。

個人的な話になりますが、今、歩いて通勤しているのですが、途中には広大なキャベツ畑があり、三宝寺池があります。そのなかを歩いていると、練馬にはまだいいところが残っていると感じます。

地域資源のよさを引き出して、そのことについて話し合い、伝えていくことが私の仕事であり、景観を守ることにつながるのだと考えています。

杉崎氏：景観を議論するのに、景観から入っていくと、すぐに行き詰ってしまいます。今の話のように、「昔の練馬はこうだったよね」というようなことから入っていき、まち歩きをして、景観について考えるのは、入り方としてとても面白いお話だと思いました。渡邉さんにお話いただいたような取り組みは、これからの景観を議論するのに、とても役に立つことだと感じました。歴史という入り口だと、それを現在のまちづくりに、どうつなげていくかという問題はありますが、とても未来志向の考えというように感じました。渡邉さんの活動はこれからのまちに、どうつながっていくと考えていますか？

渡邉氏：基本的には、地域のよさを再発見して、それが未来につながっていくのだと思います。奥村さんからも再三お話があったように、練馬は「普通のまち」で、そのまちに京都のような歴史的なまちをつくるのではなく、そのまち固有の歴史的な個性というものがあります。歴史といってもつながっていて、新しいものに歴史がないわけではないのです。古いものと新しいものをつなげて一緒に考えていく、そして地域の資源を発見することが、これからの景観につながるのだと思います。

杉崎氏：もう一言ずつコメントいただきたいと思います。景観づくりに、みなさんの活動が具体的にどう貢献できそうかと、考えられますか？

竹谷氏：光が丘はつくられたまちですので、今あるまちのいいところをいろいろな人にお話し、協力を得て、景観をよくしていこうと考えています。「安心・安全」ということも含めて、長く住み続けたいと思えるまちを、幼い子どもたちのためにも残して生きたいと考えています。

杉崎氏：谷口さんからの先ほどのお話では、景観よりもまず大切なことがあるということでしたが、谷口さんの活発な活動は、建築士会のみなさんから見たら景観づくりに一役かっているというメッセージが込められているようです。そのようなことを受けて、景観づくりに対してどのように考えますか？

谷口氏：活動そのものは、楽しくやっていこうという考えですが、一方で、それぞれの商店街や集まりの様々な活動をひとつにまとめるコーディネーターやプロデューサーという役割の出来る人が必要ですね。そうして、区や都にも発信していけるといいと思います。資源としていいものがある、面白い活動をしているのであれば、その情報を内部で共有し、外部に発信する情報ツールの整備をすると、活動の様子が変わってくると思います。

杉崎氏：岩間さんにお伺いします。個人的には景観に関心をもってきているようですが、今日のこれまでの話を聞いて団体の活動のなかで景観に貢献できそうだなと感じましたか？

岩間氏：「みやもとファーム」で落ち葉を集めるイベントを行ったときに、落ち葉が減少しているという話を聞きました。その背景には、農地や緑地を保存していくのにお金がかかるため、地主さんがその土地を手放してしまうということを知りました。そのような問題もあるなかで、ねりまベジタブルカフェは未来を担う子どもたちに、みどりの心地よさを通して、みどりのある土地の大切さを伝えていきたいと考えています。

杉崎氏：それでは、西さんにコメントをいただいて、第一部を閉めたいと思います。

西氏：今回のテーマには、「みなさんのすでにやっていること、日常の生活や活動がもう景観づくりなのですよ」というメッセージがあります。

この講座の準備の段階で、練馬にはまちづくりの活動団体さんにどうしたら景観について意識を持ってもらえるかということを考えました。そのなかで、団体同士の情報の共有・情報交換の場があるといいなと感じました。それから、景観まちづくりを行っているメンバーが団体さんの活動の場に参加させていただいて、「この活動も景観づくりにつながるのではないか」という問いかけをさせていただき、更には、団体さんのほうからも、「私たちの活動も景観づくりになりますか？」というような、投げかけをいただければ、さらに嬉しいことだと思います。

まちづくり活動は、継続性が大事ですが、活動されている方からは継続していくことが大変だという話を耳にしたことがあります。景観計画を含めて、まちづくりの活動を続けるためのサポートをする仕組みつくっていただけるように行政にお願いしたいです。

最後に、これも行政へのお願いになってしまいますが、様々なまちづくり活動が練馬のなかで活発になされているわけですが、それらのことを景観づくりとして統合していくために、まちづくりのマネージメントもやってもらいたいと思います。

杉崎氏：前半の進行をさせていただいた感想としては、景観だけを議論するのは、難しく、結局みなさんまちづくりの議論になるということですね。建築士会のみなさんは、もちろん景観が大事というアプローチで活動されていますけれども、まちづくり活動が生き生きしてくると、景観がよくなるということですね。

もうひとつの切り口として、渡邉さんがやられているような、時間と時間が繋がるような、景観という今や将来ではなくて、過去のまちの履歴も遡っていくことも含めて、景観につながっていくということを感じました。

では、これで第一部を閉めさせていただきます。

---------- 休憩 ----------

■ディスカッション（第二部）

杉崎氏：第二部は講座の参加者のみなさんから、議論してみたいことやご意見など、いただきたいと思います。

参加者 A：私の住んでいる石神井公園のエリアでは、大きな土地や農地を持っている地主さんが、意識や経済的な問題で土地や農地を持ち続けられないという事態になっています。その土地が宅地に変わったときに、長年住んでいる人がびっくりしてしまう位、小さな区割になってしまうことがあります。そうした小さな区割が増えることで、地域でのつなが

りを持ったまちづくりがやりにくくなっているのが現状です。そこで、家を建てるときに色や形などのルールを作ると、地域のつながりについて意識が生まれるのではないかと思っています。

第一部での皆さんの話を聞いて、まちづくりという言葉のなかには、建物などのハード面だけでなく、人と人とのつながりを作っていくことが根幹にあるように感じました。そうしたつながりを、元々長く住んでいる方と新しく住んだ方との間でどうしたら持つことができるのか、みなさんにお伺いしたいです。

岩間氏：やはり、農家さんとのつながりをもつのは勇気がいりますし、大変ですので、直売所に行って顔なじみになったり、ちょっとしたことを質問してみたりして、よく話すことで、つながりがつくれると思います。

杉崎氏：渡邉さんも仕事で調査をするときに農家さんや地主さんの話を聞いたりすることがあるのでしょうか？

渡邉氏：文化財の調査は、やはり旧家や農家・地主さんが多いです。個人的に行ってお話を伺ったり、昔の資料を見せていただいたりしますが、いきなり電話をしてお願いして、すぐに受け入れて下さる方もいますが、粘り強く関係をつくっていくことも必要です。資料を見せたり話をしたりしながら、いい意味で意識を持っていただくために、関係を深めていくのですが、意識を持っていただくのは、なかなか難しいところがありますね。

杉崎氏：信頼関係をつくりながら、その中でいろいろな話をしていく。そういうことをひとつひとつ積み重ねていきましょうということですが、昔から住んでいる人とも、新しく住んだ人とも、話をしていかないと、まちとして景観をよくしていこうということには、なかなかならないですからね。そうした話の中から景観のことが出てくるのかもしれないですね。他に質問やご意見などありますか？

参加者 B：私は、Nerima 景観まちづくり会議で「歩きたくなるまち練馬」を提案させていただきました。九州の佐世保のまちを歩いたときに、佐世保は車社会のようで、景観も車からの視点で大味な感じがしました。今後高齢化社会が進み社会構造が変わってくると、人がまちに出てくるようになると思います。そうすると、視覚的な環境というものが豊かな環境へのキーワードとなってくるのではないでしょうか。しかし、こういったことは、客観的に説明するのは難しいことですので、実際にまちを歩いてみて、ここは心地がいいだとか、心動かされるというような意識をすることから始めていくのがいいのではないかと考えています。今の時代は何でもありですから、ルールを作るにしても、まちに対する感覚的な意識が大事だというのが、私の意見です。

参加者 C：パネラーのみなさんの話を聞いて、地域ごとに特徴があると感じました。
あらゆる地域には文化があり歴史がありますから、そうした地域ごとの文化や歴史を大事にしながら景観づくりをしていかないと、なかなか成功しないのではないかと思います。
　あるまちは庭木をとても大事に育てる文化があるのだが、庭木の剪定で出たゴミが有料化し、庭木を育てるのにお金がかかるようになったため、みんなバッサリ木を切ってしまった。せっかくみどり豊かなまちであったのに、すっかりまちの緑がなくなってしまったということがありました。このような景観づくりと金銭的なコストに関しての行政のあり方について、みなさんどう考えていらっしゃるのでしょうか。

杉崎氏：ひとつめの話は、それぞれ地域ごとに特色があるので『練馬区の景観』と一括りには出来ないということですね。練馬区の景観計画にも地域の特徴を活かした景観づくりということが入っています。このような視点を共有することは大切ですよね。
　ふたつめの庭木の話ですが、農家さんの相続の話にもあるように、景観を守るためにはお金がかかる。行政が景観づくりを支援するならば、景観を守るためのコストに対してサポートするというやり方もあるのではないかという話ですね。

参加者 D：私の住んでいるまちでも剪定で出たゴミを有料化する話が出ていますが、庭木を植えたり、垣根をきれいにするのも美しい景観づくりをしているということですから、多少は仕方のないことなのかなと思いますし、金銭的にも協力するという気持ちでいればいいのかなと思います。ただし、場合によっていろいろな事情がありますので、折り合いをつけていくのは難しいでしょうね。

杉崎氏：先ほどの話ですと、払える人は大丈夫。ただ、払えないから木を切ってしまうというところが問題のようですね。

参加者 C：一般的にお金がかかるのは嫌だという風潮は広まりやすいようです。ですから、景観に関する市民参加の講座や会合を積極的に行って、コストがかかることにどんな意義があるのかちゃんと伝えること、共有していくことが大切なんだと考えています。

杉崎氏：実際にみどりを含めて景観を守っている人の話を聞いてみたり、もっと地域に対して景観の話をしてみるといいのでしょうね。

参加者 D：景観とは、まちづくりの風景だと思います。パネラーのみなさんのお話を聞いて、練馬区には素晴らしい景観がたくさんあるのだなと感じました。
　ひとつお聞きしてみたいのですが、谷口さんの江古田の話のなかで心無いハードの例に、防災倉庫が無造作に置かれているのをどうにかしたいという一方で、竹谷さんは安心安全

なまちづくりがいい景観につながるとおっしゃっておりました。安心・安全・防災・福祉といったまちづくりに大切なことと、見え方である景観との間にはうまくかみ合わないこともあります。かみ合わないところがあるけれど、どちらもまちづくりには大事なもの。その調和についてどう考えますか。

岩間氏：最初の方に金沢の話がありましたが、金沢は武家屋敷やお城といった歴史的景観が残るスポットが個々に離れていて、まちの一貫性というところで、とてももったいないと感じました。見てまわるのも大変だったので、レンタサイクルを借りました。練馬にもタウンサイクルがたくさんあるので、もっと活用されたらいいと思います。上石神井は駅前の自転車の通行が多いのですが、道は自転車で走りやすくはなっていないので、自転車で走りやすいまちづくりも進めてほしいです。

渡邉氏：川越は大火があり、蔵づくりが増えたという経緯があります。江戸のような街並みを特長とするならば、防災用の備蓄倉庫を蔵の形にするなど、見た目から景観を保つというような工夫をされているところもあるようです。

景観には様々な表情があるということでしたが、歴史というのは当然変わっていくもので、そのなかに様々な表情がありますが、時代ごとのまちの表情に違和感があると、まずいのではないかと思います。その時代ごとの表情がいいというのが望むべく景観なのだと思いました。

谷口氏：まちを歩いていると、塀・壁・手すりが目に付きます。手すりの色を変えたり、ブロック塀からきれいな花がのぞいていたり、トイレの落書き消しに絵を描いたりと、ひと工夫するだけで、まちの景観はかなり変わってくるのではないかと思います。

竹谷氏：光が丘は放置自転車がなくなったら、人々のふれあいが生まれ、とてもいいまちになりました。安心安全のまちづくりとは、コミュニケーション、人と人とのつながりが大切だと思います。子どもたちは、自分たちの生まれたまちだから、光が丘が好きだと言っていました。人のつながりを大事にしながら、ふるさとになるようなまちづくりをしていきたいと考えています。

杉崎氏：最後に西さんに本日の感想をいただきたいと思います。

西氏：今日の 4 名のパネラー方々からは、それぞれの活動の様々なお話をしていただきましたが、全てが景観につながるものだと思います。この講座をスタートとして、こういった議論の積み重ねから新しい見方が生まれ、心地よい景観が出来てくるのではないかと思いました。

杉崎氏：昨年、まちづくりセンターの事業である「まちづくりカフェ」で、身近な景観をテーマにお話いただいたときに、景観の専門家であっても、景観だけを議論していても、まちづくりの総合的な話になってしまう。結局はまちがよくなると、景観がよくなるという話がありました。

竹谷さん、谷口さんの話にありました放置自転車や防災倉庫の例を見ましても、やはりまちの課題が改善されると、見た目もよくなると感じました。このことが、まさしく景観づくりなのではないでしょうか。

個人的には、「景観がよくなると、こんないいことがあります」というような、得する景観のようなことがあると、もっと景観の意識が広がっていくのではないかと思っています。

やはり景観を議論するにはもうひと工夫必要だと感じました。今後のアプローチについて、もっと考えていきたいですね。

以上